
先生。 ~ m e e t a g a i n ~

ジェレミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生。～meet again～

【Nコード】

N4953E

【作者名】

ジェレミー

【あらすじ】

完結済小説「先生。」より（続編）あれから2年。主婦・はるか、歯科医師・前田の束の間の再会。

変わらぬ先生。

11月。

前田先生と初めて出会ったあの日から、二度目の秋を迎えていた。

日が短くなつたと感じながら、洗濯物を片付けてパソコンを開いた。

検索結果の画面を見ながら、1人呆然と座り込んでいた。

先生が神戸に帰ったと聞かされたのが1年半前。

パソコンを開いては時々、先生の名前を検索していた。

どこで働いているのか

元気にしているのか

ただそれが知りたいだけだった。

元気ならそれでいい・・・

そんな軽い気持ちで検索していたが、この1年半、前田先生らしき人にヒットすることはなかった。

それが

1ヶ月ぶりに先生の名前を入力すると、今まで出ることのなかった検索結果が・・・

「 歯科クリニック 院長 前田晋一」

名前のみで、“歯科医”と入力したわけでもないのに、歯科クリニックの院長として出た名前。

前田晋一

一文字も狂うことなく、同姓同名。

歯科医で、同じ名前で、別人である確立はどれくらい？

間違いなく前田先生だと確信していても、そんな疑問が頭をよぎる。

呆然としたのは、先生の名前がヒットしたからじゃない。

院長と記されたクリニックの所在地は、ここから数十分離れただけの・・・隣町

トクン トクン トクン トクン

2年前を思い出すかのように、胸の鼓動が鳴り始める

どうして

どうしてここにいるの？

神戸じゃなかったの？

いつから？

いつから？

前田先生・・・

どうして？

震えた手でマウスを動かし、クリニックのページを開く。

「 歯科クリニック 一般歯科 インプラント 審美歯科 矯正
歯科 予防歯科 ホワイトニング スポーツ歯科

総院長 伊戸田 肇

院長 前田晋一

トクンツ・・・

「・・・せん・・・せい・・・」

あの頃と変わらない、前田先生の顔写真がそこにあった。

凛々しい切れ長の目

額からスツとのびた高い鼻

今にも声が聞こえてきそうな・・・

インターネットに掲載された、ただの顔写真なのに、息を吞んで見
惚れてしまう

顔が熱くなっていく

どうして・・・こんなに近くにいるの・・・

携帯電話を手に取り、麻耶ちゃんにメールを送った。

『前田先生 見つけたかも』

どうしたらいいのか わからない

先生がいた

思いがけないところに

先生はいた

いないと思っていたはずの先生

もう会えないと思っていた

先生・・・

「来週の水曜日、出張になったんだ」

仕事から帰った和晃が、ビールを一口飲んでから言った。

「出張？どこに？」

「大阪。今井さんと」

「えっそれって・・・」

「そ。名目は出張だけど、食べ歩きだよ」

「ええーいいなあ。それ食事代全部会社もちでしょー？」

「仕事の一環だからね。だけど、間を空けずに朝から晩まで食べなきゃなんないんだよ。結構ツライんだって」

「あゝ、そういえば、東京の食べ歩きの時も、後半はかなり辛かったって言ってたね。」

「んんー・・・またあの地獄のような食べ歩きかぁ・・・」

「初めっからとばして食べるからでしょ。少しずつ味見程度に食べないと」

「そうなんだけどねー。美味いといついつい食べちゃうんだなこれが」
「ふうーん・・・うらやましー」

「水曜の昼から出発して、木曜の夜帰るから」

「あ、泊まりなんだ」

「うん。ごめんね。はるか・・・1人になるね・・・」

「あはは、気にしないで。大丈夫だから」

1年半前、和晃にいわゆる“メルカノ”がいたことが発覚して以来、和晃はそれまでに比べてより一層優しく、私を思いやってくれるようになった。

和晃なりの誠意なのだろう。

私は素直にそれを受け入れてきた。

怒りや憎しみを抱いたまま生きていくのはしんどい。

和晃を許そうと決めたあの日から、穏やかな日々が続いていた。

なのに・・・

「・・・だからね」

「・・・は？」

「ええっ!？」

「あ、ごめん。もっかい言って」

「大丈夫？はるか・眠たい？」

「あ、うん、少しね。で、何て？」

「昼の新幹線だから、朝はゆつくりでいいからね」

「うん、わかった。来週の水曜日ね」

サインペンを手に取り、リビングのカレンダーにしるしをつけた。

11月12日水曜日 和晃・大阪出張・・・

一瞬、よからぬことが頭をよぎる

前田先生に 会いに行こうか・・・

「ごちそうさまでした」

食事を終えた和晃が、食器をシンクへ運ぶ。

「お風呂入ってね、和晃」

「うん。じゃあお先」

浴室の扉が閉まる音を確認してから、自分の携帯電話を開いた。

着信メールあり

麻耶ちゃんだ

『うそ！？どこで？ネットで！？』

着信は0時14分。

もうすでに深夜の2時を回っている。

返信はしないでおくことにした。

『もちろん会いに行くんやろ!?』

仕事の昼休みに、麻耶ちゃんが電話をかけてきた。
やや興奮気味だ。

「……………」

『何??迷つとんの?はるちゃん』

「……………」

『なんでなん?ずっと会いたかつてんやろ?神戸まで行つてんやんか!やつと見つかったんやんか!!!』

「うん、そうだけど……………」

『はるちゃん……………』

「先生には……………会いたい」

『うん』

「でも……………いいのかな……………行ったりして」

『ああーわかった。はるちゃん、行けって言つてほしいんやろ?ウチに』

「え?」

『はるちゃん。悪いけどウチは何があつてもはるちゃんの味方やに。和晃さんには申し訳ないけど、ウチははるちゃんの気持ち最優先やでさあ』

「……………」

『うん。とにかくウチは絶対会いに行くべきやと思うわ。あんないなくなり方してんやし、何か聞きに行つてもええんちゃう?』

「……………」

『はるちゃん、今でも先生が好きなん?』

「……………」

『でもない。それならそれでええやん。好きやから会いに行く。顔見に行くくらいええのんよ』

「……………」

『聞きたいこともたくさんあんなやろ?』

「・・・ある」

『ほな、ちゃんと聞いてきいよ?』

「うん」

『大丈夫やって。はるちゃんは、自分で思ってるよりずっとしつかりしとるし、間違い犯したりはせえへんよ』

「うん・・・わかった。行ってみる」

『おお!その意気その意気』

「ありがとう、麻耶ちゃん」

『もおゝ、ほんま頼むわあゝ。今度ウチが恋愛で悩んだ時は、はるちゃんにいっぱい相談に乗ってもらうでな』

「アハハツ、うん!必ずね」

麻耶ちゃんの言う通りだ。

私は背中を押してもらいたかった。

麻耶ちゃんなら、「絶対に会いに行くべきだ」と言うだろうと、頭で予想していた。

麻耶ちゃんと話すことで、自分の気持ちを確かめたかったのかもしれない。

先生に、会いたいという気持ちを。

先生と会うと決めてからは、待ち遠しい反面、本当に行ってもいいのだろうかという迷いと葛藤が続いた。

和晃がい不在ときは先生を想い、和晃が帰ってくると、自分への嫌悪感が募った。

早くその日が来て欲しいと思えばなかなか来ないが、来て欲しくな
いと思うとすぐにやって来る。

和晃の出張の日は、一瞬でやって来た。

迷っている、本当に行ってもいいのか、でも、やっぱり会いたい。
当日はもう、自分でもよくわからなかった。
とにかく行ってみよう。
それだけだった。

「何時の新幹線？」

「コーヒーを飲みながら、テーブルの向かいで遅めの朝食を摂る和晃に聞いた。

「13時ちようどの・・・東京行きって言ってたかな。切符は今井さんが持つてるから」

「送ろうか？駅まで」

「いや、今井さんがタクシーでここに寄ってくれるから・・・って、この前も言っただけど」

和晃が目を細めて私を見る。

「あつ・・・そうだったね・・・アハハ・・・」

そんなこと言ってただろう。この前っていつ？

「なに？なんかうわの空みたいだけど」

「私？そうかな」

「大丈夫？ホントに1人で」

「大丈夫ですっ」

「あ、でも、はるかも今日出掛けるんだよね？」

一瞬、ドキッとした。

「うん、友里とね」

そういえば以前も、前田先生に会いに行く時は、よく友里を言い訳にしていた。

今回も、友里しか浮かばなかった。友里と和晃は全く接点がないた

め、何か知られる心配も少ない。

「夜の食事だろ？気をつけて帰るんだよ。」

「はい」

30分ほど経って、和晃の携帯が鳴った。

「もしもし・・・おはようございます・・・はい、あ、はい、じゃ、下に行きます・・・はい」

和晃は携帯をポケットに入れると、1泊分の荷物の入ったバッグを持って玄関へ向かった。

「今井さん、着いたって？」

「うん、今、下にいるって」

「じゃあ、今井さんによろしく。また今度“デイル”に食べに行きますって言っというてよ」

「うん、わかった。じゃあ、いつてきます」

「うん、いつてらっしゃい。気をつけて」

「はるかも。戸締りしっかりね。連絡するから」

「うん」

玄関の扉が閉まる。

鍵をかけるのと同時に、ため息が漏れた。

「ハア・・・」

ごめんね和晃・・・

どうしても会いたいの

今回だけ・・・一度会いに行くだけだから・・・

2年前は、前田先生に会いに行こうが、和晃に対する罪悪感はなかった。

でも、今は違う。

無性に罪悪感に苛まれていた。
時間が経ってしまったせいか。

2年前より、和晃に愛されていると実感するようになったせいか。

先生を好きな気持ちは、2年前のままなのに。

寢室のタンスの奥から、隠していた封筒を取り出した。

中には、先生を好きだと思ったあの日、思わずネットの顔写真をプリントアウトした紙と、先生と一緒に行ったラグビー観戦の半券が入っている。

そして、携帯電話にぶら下がった、ラグビーボールのストラップ。

私がいに行ったら、先生はどんな顔をするだろう。

今日はクリニックにいるのだろうか。

学会やセミナーで、県外へ行っている可能性だってある。

約束もせず、一方的に会いに行つて・・・

本当に会えるのだろうか。

封筒の中身を取り出して眺める。

この前ネットで見た先生の顔と、着ている服以外は何も変わっていない。

半券は少し、茶色く色褪せていた。

今でも鮮明によみがえる競技場での記憶。

けれど、その半券の色は、2年という歳月を確実に物語っていた。

久しぶりのおしゃれをして、19時半に家を出た。

前田先生が今現在勤務するクリニックは、以前のオフィス街とは違い、デパートや飲食店が立ち並ぶ市街地のビルにある。

バスの窓から外を眺めると、夜の街の光が、色づいた銀杏を照らしている。

そう。

先生に初めて会ったあの日も、さわやかな秋空の下に、銀杏がさらさらと輝いていた。

私はこれから先もずっと、この季節が来るたびに、先生とのことを思い出すのだろう。

クリニックのあるビルは、意外に早く見つかった。

ビルを見て、改めてショックを受けた。

先生がいなくなってから、ショッピングで何度かこのビルの前を通ったことがある。

こんなに近くにいたのかと、同じショックが何度も襲う。

なんだか胸が、ドキドキしてきた。

エレベーターで7階に上がると、扉の前にすぐに受付があり、フロア全体が歯科クリニックになっていた。

あの、歯科特有のにおいが鼻を突く。

先生が前にいたクリニックと同じで、内装がとてもキレイだ。受付カウンターの座る若い女性に、すぐに声をかけられた。

「こんにちは。ご予約でしょうか？」

「あ、いえ、あのう・・・」

「はい？」

「こちらに・・・前田先生はいらっしゃいますか？」

「あ、はい、ありますが・・・前田晋一でしょうか？」

女性は不思議そうな顔をしている。

「・・・はい」

「えーと、あのう失礼ですが、どういったご用件でしょうか？」

「あ・・・その・・・お会いできますか？」

「はい・・・あの、只今他の患者様の治療に当たっておりますので、しばらくお待ち頂いてもよろしいでしょうか？」

「・・・はい」

「お名前を伺ってもよろしいですか？」

「・・・春日部です・・・」

「春日部様ですね。前田の方にお伝えして参りますので、おかけになつてお待ち下さい。」

女性は愛想よく立ち上がり、待合室のソファをすすめた。
上品なピュアホワイトのソファの端に座った。

待合室には静かに音楽が流れている。

時間が遅いせいか、自分以外は誰もいない。

先生は、私の名前を聞いてどう思うだろう。

先生は、私を見てどんな顔をするだろう。

緊張が増していく。

本当に、来てよかったのだろうか。

今頃になつて

こんなところへ

診療室の扉が開いた

思わず、息を呑む

ダークグレーのシャツに黒いネクタイ、長い白衣に黒のズボン。
白衣の袖は、相変わらず肘まで捲くられていて、左手にカルテを持
っている。

背は、そんなに高くない。

2年前と変わらない、前田先生がそこにいた。

私は立ち上がり

驚きに満ちた表情で、先生は私を見ている。

「……………はるかさん……………」

胸の鼓動が　　高鳴る

声が出ない

「……………」

受付の女性が、こちらを横目で見ながらカウンターへ戻ってきた。

何か・・

何か言わなきゃ

「あっ・・あのう・・私・・」

「はるかさん・・」

先生は、受付カウンターにある置時計を見て言った。

「西通りにある、“オルヌ”っていうカフェで待っていてくれませんか？」

受付の女性を気にしてか、若干小声だった。

先生は、困ったような顔をしている。

どうしよう・・・

やっぱり来るべきじゃ・・・

「終わったら必ず行くから」

先生は、真っ直ぐ私を見て言うと、私の返事を聞かずに診療室へ戻って行った。

ビルを出て、西通りへ向かう。

足取りが重い。

先生の、困った表情が、頭から離れない。

きっと、迷惑だったに違いない

2年ぶりに会えた先生

あんなに探し求めて、会いたかった先生

長かった2年

先生にとっては、どんな2年だったのだろうか

私とのことは、もう、過ぎたことなのだろうか

あのラグビーの半券のように

色褪せてしまったのだろうか。

先生の想い。

カフェ“オルヌ”は、西通りにある小さなお店だった。ぼんやり歩いていた私は、もう少しで見逃すところだった。

ガラス扉を開けると、落ち着いたジャズ音楽と、強烈なコーヒーの薫りに全身が包まれた。

モダンな造りの店の奥には、5人掛けのカウンターがあり、カウンターの中から50代くらいの男性がカップを拭きながらこちらを見た。

「いらつしやい」

カウンター以外に、2人掛けのテーブルが4つ。

マスターらしき人に軽く会釈をしてから、奥から2番目のテーブルの椅子に座る。

テーブルに備えてある小さなメニューを見ると、マスターと同じ年くらいの女性がお水を運んできた。

夫婦で営んでいるお店なのだろうか。

お客は私1人だ。

「こんばんは。何になさいます?」

「あ・・じゃあ、カプチーノを」

「はい。少々お待ち下さいね。」

女性は笑顔を向けると、マスターに「カプチーノ」と伝えた。

携帯電話を開くと、21時になろうとしていた。

先生は、仕事が終わったら必ず来ると言っていた。

このお店は何時まで開いているのだろうか・・

水の入ったグラスの氷がカランと鳴った。

前田先生が来たら、何と云えばいいだろう。

聞きたいことはたくさんある。

ちゃんと言葉にできるだろうか。

2年前のように、何も言えずに、何も聞かずに、後悔するようになるとだけはしたくない。

やっと見つけたのだから

やっと会えたのだから

手に握りしめていた携帯電話のメール着信音が鳴り、ハッとした。和晃だ。

『はるか、食事は済んだ？俺は今、梅田にあるホテルに着いたよ。こっちに到着した直後から食べっぱなしでお腹いっぱい。今から今井さんと部屋で飲みます。また寝る前にメールするよ』

返信はせずに、そのまま閉じた。

運ばれてきたカプチーノから、ふわふわと立つ湯気をぼんやり見ていた。

先生はいつ来るだろう

どのくらいで来るだろう

忙しい時に、邪魔をしてしまったのではないか

後ろ向きな考えばかりが、浮かんでは消える

そういえば、先生にはいつも待たされている

初めて駅前の“ブレイク”で2人で会ったときも

ラグビー観戦の日の競技場でも

そして1年半

こんな日が来るのを、私は心のどこかで待っていた

「いらっしやい」というマスターの声につられて、入口の方を見た

前田先生

走って来たのか、鼻の頭に少し汗を滲ませて、私に微笑みながら近づいてくる。

「マスター、僕、エスプレッソ」

先生がマスターに声をかけると、マスターは何も言わずにただ頷いた。

先生は黒のジャケットを着て、手には何も持っていない。優しく笑いながら、テーブルの向かいに座る。

「ごめんね・・・待たせて」

あの頃と同じ、変わらない笑顔

私はこの笑顔に、ただ惹かれていくばかりだった

「すみません・・・突然・・・」

「いや・・・いいんだ・・・。よく、あそこ（クリニック）がわかったね」

「あ・・・、ネットで見つけたんです・・・先生の名前を・・・」

なんだか、まともに先生の顔が見られない

「そっか・・・。・・・元気だった？はるかさん・・・」

「・・・はい」

先生が目の前にいるのに、どことなく実感が湧かない

現実なのに、現実ではないような気分

「神戸に・・・お帰りになったんじゃないですか・・・？」

「・・・ああ・・・まあ、一度は帰ったんだけどね。でもやっぱり、こっちに10年以上いたから、暮らしやすくてね・・・また戻ることにしたんだ。」

「・・・」

「今働いてる・・・あそこさ、大学の時の同じラグビー部だった伊戸田っていう先輩が開業したんだけど、こっちに帰ろうかって考えてる時に、院長やらないかって誘われてね・・・」

「・・・そうですか・・・」

「うん・・・」

「いつから・・・あのクリニックで・・・？」

「そろそろ１年くらいかな・・・正式に院長になったのは最近なんだけどね」

だから、名前はずっとヒットしなかったんだ・・・

１年も前から・・・こっちに・・・

「・・・神戸に・・・行ったんです・・・」

「え・・・？」

「１年半前・・・先生がいなくなっただって知った後に・・・」

「・・・」

驚いた表情で、どこを見えるというわけでもなく、先生の目が動く

「・・・僕を・・・探しに・・・？」

先生は、遠慮がちな苦笑いを浮かべた

「・・・いえ・・・、そんな途方もないことは・・・」

「あつ・・・ハハッ、そうだよね」

「・・・先生が、生まれ育った街を見てみたくなって・・・」

「・・・そっか。そうだったんだ・・・。どうだった？神戸は」

「素敵な街でした・・・すごく。初日は、北野を歩いて、夜はメリケンパークに夜景を見に行つて・・・。ポートタワーが綺麗で・・・ホントに」

「うん・・・神戸の夜景は僕も好きなんだ。そっかあ・・・行ってきたのかあ・・・」

少しだけ、張り詰めていた空気が和んだ気がした

「はい、エスプレッソお待たせ」

マスターが先生の前にエスプレッソを置いた。

新しいコーヒーの薫りが漂う。

先生は、ゆっくりカップを持ち、薫りを楽しむように一口飲んだ
「・・・どうして・・・、前のクリニック、お辞めになったんですか

？」

思い切つて聞いてみると、先生は口元に笑みを浮かべて下向き加減に答える

「んー．．．いろいろあつてね．．．総院長との考え方の違いとか．．．他にもね」

「ー．．．定期検診で、次の春にまたお会いできると思つてたんです」

「うん．．．ごめんね。僕が診てあげるつて言つたのに」

謝られると、胸の奥が、きつく締め付けられる

「．．．ストラップ．．．ありがとうございます」

「あ．．．ちゃんと受け取ってくれたんだ」

「．．．はい。加護先生から渡されて」

いなくなつた先生を想い、絶望感に苛まれていた時だった

「何か．．．残しておきたくてね。はるかさんには、ラグビーも一緒に観に行つてもらつたし、お礼のつもりだったんだ」

「お礼．．．」

ペアであるはずのもう１つのストラップは、先生が持っているんですか？

．．．聞きたいのに．．．聞く勇気がない

「私の連絡先を、先生に伝えていただけるように頼んでみたんですが．．．聞いていませんか？」

「え．．．？そうなの？」

やっぱり．．．伝わっていなかった

「いつ？」

「いえ．．．いいんです」

今はもう．．．そんなことどうだっていい

冷たくなつたカプチーノの残りを飲み干す

「そろそろ・・・時間なんだが・・・」

申し訳なさそうに、マスターが近づいてきて言った。

「あつ、すみません、そうだった。お幾らですか？」

「1200円ね」

先生が財布を出して、お金を払う

「いつも来てくれてるのに、すまないね」

「いえ、時間は時間ですから」

マスターは先生から2000円受け取ると、カウンターにあるレジにお釣りを取りに行った。

「いつも・・・いらしてるんですか？」

私が尋ねると、先生は残りのエスプレッソを一気に飲んで言った

「うん。いつもっていうか、時々だけど、ここ23時までやってるし、帰り道だしね」

「そうなんですか」

マスターが先生にお釣りを渡す。

「また来てよ」

「うん。ごちそうさま」

出口に向かう先生に、私も続く

「ごちそうさまでした」

「ありがとう。また来てね」

マスターが微笑む

「はい」

頷いてから、店を出た。

ネオン輝く夜の街を、先生と2人、並んで歩く。

「あのう、コーヒーのお金・・・」

「ああ、いいよ全然。ごちそうさせて」

「すみません・・・」

「家の近くまで送ろうか？」

先生の車に2人・・・自分の気持ち、抑えられなくなる気がした

「あつ、いえ、いいんです。バスで帰ります」

「・・・じゃあ、バス停まで」

「・・・・・・」

「ん？」

「前にも、同じようなことありましたね」

「前？」

「ハイ、先生が、学会で東京に行かなきゃいけない日に、一緒に“ブレイク”でコーヒーを飲んで、その後駅前のバス停まで歩いて・・・」

「ああ、そうだ。そうだったね。クリスマス前かなんかだったよね」

「ハイ」

先生は、優しく微笑む

「今日はどこから乗るの？」

「あ、中央通りからです」

「そつか。じゃ、こっち通っていいとか。ちょっと遠回りになるけど。時間大丈夫？」

先生は、公園を指差す

少しだけ長く、先生と歩ける

「はい・・・大丈夫です」

公園の遊歩道は、木々の間から差し込むネオンの光と、所々に建つ街灯の光で、比較的明るくなっていた。

中央広場には、遊ぶ子供のいない淋しげな遊具が、静かにそこにある。

「仕事の帰りにね、時々通るんだ。街中を歩くのもいいけど、こっちの方が空気が澄んでる気がしてさ」

「・・・そうですね」

2人並んで歩く足音と、お互いの声が、やけにはっきり聞こえる。周りには誰もいない。

「・・・はるかさん」

トクンツ・・・

先生にそう呼ばれると、胸の鼓動が鳴り止まなくなる

「・・・会いに来てくれてありがとう」

「・・・いえ・・・突然で・・・返って申し訳なかったかなって・・・」

「いや・・・正直、驚いたんだ。もう・・・会うことはないだろうと思っていたし」

「・・・」

歩く足が、止まった

「先生」

「はるかさん」

私の言葉を遮るように、先生は私の目の前に立った

真っ直ぐな目

「もう・・・わかっていると思うけど・・・」

その眼差しに、どれほど引き寄せられていただろう

「僕は・・・」

トクン

トクン

「・・・はるかさんが好きです」

トクッ・・・

息が・・・苦しい

「
・
・
・
・
」
「
・
・
・
・
」

前田先生

「・・・2年前からずっと」

前田先生

「今も」

前田先生

「・・・」

先生の顔が滲んでいく

涙が　　溢れ出す

「はるかさん・・・」

ふわりと、クリニックのおいがする

先生の肩越しに、遊歩道の先だけが延々と見える

顔には先生の胸元が触れ、背中には先生の腕が回されている

耳元で先生の吐息を感じ、頬には先生の鼓動が伝わる

この瞬間を どれほど夢見たことだろう

前田先生に抱きしめられる

体の全部で、「先生」を感じる

今ここに、「先生」がいる

「先生・・・」

「・・・ん？」

「・・・私も・・・」

「・・・」

「私も先生が」

背中腕に、グツと力が入るのを感じた

「はるかさん・・・」

「・・・」

「あなたには・・・ご主人がいる」

「・・・」

「僕は・・・ご主人からはるかさんを奪うつもりはないんです・・・」

「・・・」

「自分の気持ちを優先して誰かを傷つけたり、苦しめたりするのは嫌なんです」

「・・・」

「それはご主人だけじゃなく、はるかさんも苦しめることになる・・・」

「

涙が、溢れる

「その後は結局、その罪悪感で・・・幸せを感じられなくなる」

「・・・だけどう・・・」

「僕とはるかさんは・・・2人でいてはいけないんです」

「・・・」

「いくところまでいって、僕を好きになったことを後悔して欲しくない・・・あなたに、辛い思いはさせたくないんです」

「・・・」

「2年経った今・・・こうやってあなたは、僕のところへ来てくれた・・・いつまでもそんなふうに、想われていたいんです」

先生の想いが、痛いほど胸に響く

「これは2年前から出していた答えで・・・間違っていなかったと思ってる・・・」

「・・・」

もう、やめて

「はるかさんが治療に来るたびに・・・僕は嬉しかった。あなたに会えることも、あなたに少しでも触れられることも・・・」

「・・・」

もう、やめて

「一緒にラグビーを観に行ったこと・・・僕にとっては最高の思い出です」

もうこれ以上、好きにさせないで・・・！

先生が右手で、私の後ろ髪を優しく撫でた

「一度でいいからこうして・・・あなたをこの腕に、抱きしめてみたかった・・・」

涙が溢れて 瞼が痛い

「・・・」

「・・・僕は今・・・本当に幸せです」

前田先生が好き

こんなに

先生が好きなのに

ゆっくりと、肩が離れる

先生が真っ直ぐ私を見て

やわらかく微笑む

「泣かないで、はるかさん」

私の頬の涙を拭う

あたたかな、先生の手

私の腕を伝って、両手を包む

「はるかさん」

「・・・はい」

「幸せになってください」

「・・・」

「あなたの幸せが、僕の望みです」

「・・・」

声が出せず、ただ、一度頷いた

先生が、そう 望むなら

「あなたに会えて、僕は本当によかった」

私も

「私も・・・先生に会えて・・・よかったです」

先生を好きになってよかった

先生の笑顔

先生の声

先生のぬくもり

先生の想い

忘れない

前田先生を

前田先生を好きになった

自分を・・・

先生は、私の右腕をグンと力強く引いた。

最後に

痛いほど強く

私を抱きしめた。

中央通りのバス停は、深夜の最終バス間近だというのに、昼間のように人が多い。

「バス・・・大丈夫？人多そうだけど」
「ハイ、大丈夫です」

きつと、これが最後

「じゃあ・・・」

「・・・はい」

きつと、もう会わない

「・・・元気でね、はるかさん」

先生が、優しく笑う

「・・・前田先生も」

笑顔を向ける

「うん、ありがとう」

バスに乗り、窓から歩道に立つ先生を見つめる

貫くことの出来ない 想いがある

結婚しても、いつも一人だった私に

人に恋する喜びを

もう一度感じさせてくれた先生

私を好きだと

言ってくれた

先生

さよなら

先生

前田先生

遠ざかる窓越しの先生と

いつまでも見つめ合っていた

これが私と先生の

本当の意味での

最後だった

ガチャガチャと、玄関の鍵が開けられる

「ただいまあゝ」

「あ、おかえりいゝ」

バッグとお土産の入った袋を持って、和晃が帰って来た。

「いやあゝ疲れた疲れた」

「どうだった？大阪」

「いいねー！大阪、すごくいいよ！」

「ホント？」

「んゝ、食べ物美味しいし、人はみんな気さくでおもしろいしさ」

「へええゝ、いいなあー。」

「あ、はい、これお土産」

「わー！なにになに？？」

「えつとねえ、はい、これが、たこやきまんじゅう、大阪あんぷり

ン、たこやきせんべい、たこやき羊羹・・」

「ちつ、ちよちよちよ、待ってよ、なんでお菓子ばつかなの？たこ

やき羊羹？？」

「そうそう、このたこやき羊羹がまた美味いんだな」

「お菓子ばかりい・・」

「あ、一口餃子も買ってきたよ。なんかね、すごく有名な店なんだ

つて」

「えゝ！ホント！？食べよう今から！」

「じゃあ、オレが焼いてあげよう」

「やったー！」

前田先生

私はいま

幸せです

前田先生の

望み通りに

先生の想い。(後書き)

この物語を、歯科医師M・S氏に捧ぐ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953e/>

先生。～m e e t a g a i n～

2011年1月14日14時36分発行